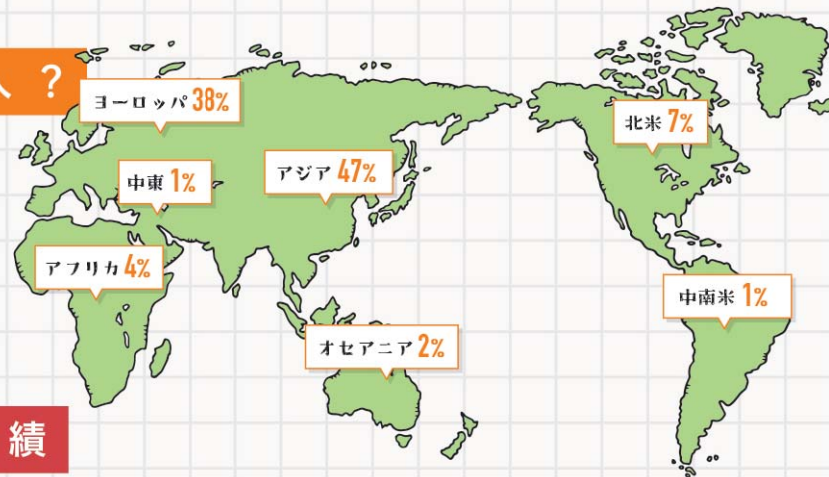


サイエンス・ダイアログとは？

日本学術振興会（学振）のフェローシップ制度により来日した外国人研究者（フェロー）を講師として高等学校等に派遣するプログラムです。
講師は自身の研究や出身国に関する講義を英語で行います。

講師になるのはどんな人？

講師は、学振のフェローシップ制度によって、厳しい審査を経て世界各国から来日し、最先端の学術研究に携わっている若手研究者です。



申込期間（締切厳守）

1 学期開催分申込（2025年 4月～8月）

2025 2/10 Mon 2025 2/14 Fri 17時締切

2 学期開催分申込（2025年 9月～12月）

2025 5/12 Mon 2025 5/16 Fri 17時締切

3 学期開催分申込（2026年 1月～3月）

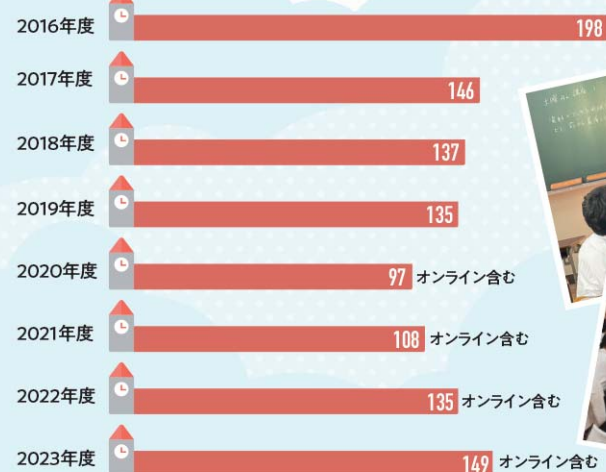
2025 9/1 Mon 2025 9/5 Fri 17時締切

※参加申込書を提出専用 Web ページからご提出ください。申請書のダウンロードや申込手続きの詳細はサイエンス・ダイアログ Web サイトをご覧ください。

実績

全国で約 230 校の学校が参加しています。参加した生徒はのべ約 72,500 人に上っています。授業後のアンケートで「再度講義を聴きたい」と回答した生徒は全体の約 90% と高い満足度を誇ります。

実績件数の推移



参加するには？

お申し込みの際は、必ず以下の Web サイトに掲載の「実施要領」をご一読ください。

打ち合わせ

学振から参加校の先生に、講師側の連絡先をお伝えします。参加校の先生から講師側に連絡を取り、両者にて講義内容や必要な機器などについて打ち合わせを行ってください。

Webサイト

サイエンス・ダイアログ Web サイト（日本語）
<https://www.jsps.go.jp/j-sdialogue/>

交通費

講義実施後に、学振から講師及び講義補助者に交通費を支給します。支給額は学振の規程に基づいて算出します。



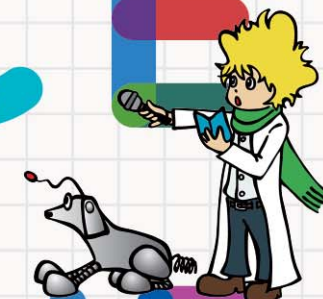
実施状況がご覧いただけるほか、必要な資料のダウンロードができます。
申込書 / 報告書、アンケート様式 / サンプル英文（講師側との連絡用）

2025 年度

SCIENCE

サイエンス・ダイアログ

DIALOGUE



世界中の研究者と科学が紡ぐ、

講義と対話の舞台。

独立行政法人 日本学術振興会 国際事業部 人物交流課 〒102-0083 東京都千代田区麹町 5-3-1

お電話でのお問い合わせ ☎ 03-3263-1730

メールでのお問い合わせ ✉ sdialogue@jsps.go.jp



日本学術振興会（JSPS）とは？

文部科学省所管の独立行政法人で、日本の学術研究の振興を担う機関です。博士号取得前後の外国人研究者に対し、日本で研究を行うためのフェローシップを提供しています。

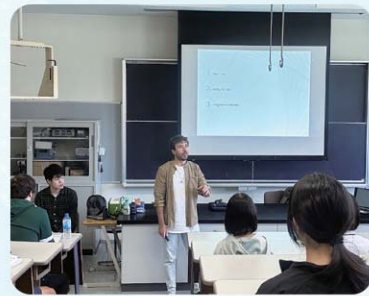
世界とつながる。英語でひろがる。サイエンス・ダイアログで、教室に未来がやってくる。



2024.5

東京都立戸山高等学校 講師 東京工業大学(当時)/Dr. Antonio CAUCHI [イタリア]

テーマ A journey around the world through Number Theory



英語での授業で、学術的研究と国際性に触れる機会に

5月17日に、SSHの探究活動の時間を利用して物理コース30名の生徒が講義を受けました。毎年、サイエンス・ダイアログの物理の講義を受講しており、生徒は楽しみにしています。今回は講師の先生がイタリア出身ということでイタリアにまつわる話から、数論の話題ではフェルマーの最終定理から、まだ解決されていないBSD予想までの関連したお話を聞きました。

内容的には難しいこともありましたが、質問に付き合っていたら生徒たちも取り組むことができました。最後は別れを惜しみ、玄関まで複数の生徒がお見送りに行くほどでした。生徒たちの数学への興味だけでなく、海外への興味が高まる機会となりました。

2024.5

奈良県立青翔高等学校・青翔中学校 講師 大阪大学/Dr. Rizki Tsari ANDRIANI [インドネシア]

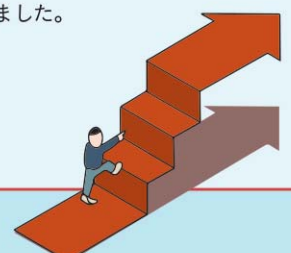
テーマ Science and research



生徒が興味を持てるよう工夫された、熱心に学べる講義

講師の先生は、事前のメールでの連絡、資料提供から、非常に丁寧に対応してくださいました。出身国の紹介、研究者としての経歴、研究概要のレクチャー、いずれにおいても、生徒の興味を引くよう工夫してお話してください、本当にありがとうございました。以前は同様の講義を中学生対象にされたこともあるとのことで、日本の生徒たちの理解度合いを

良くご理解いただいたうえでご準備いただいていると感じました。参加した生徒たちも大変喜び、熱心に学んでいました。



その他こんな講義が行われています！

<p>福井県立大学 × スウェーデン</p> <p>Development of diagnostic method and killer T cell-inducing vaccine for viral whirling disease</p>	<p>海洋研究開発機構 × 英国</p> <p>A telescope through time: How to investigate Earth's History</p>	<p>東京外国語大学 × ハンガリー</p> <p>Sharing Edo Japan on YouTube: How to Make History Cool</p>	<p>北海道大学 × シンガポール</p> <p>Species distribution models</p>
--	--	--	--

2024年度サイエンス・ダイアログ参加者からの声

生徒から

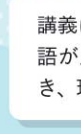
from students



英語のリスニング力をもっと鍛えた方がいいなと自覚することができるいい機会になった。自分が今後どのように何を学んでいけばいいのかわかることができた。



興味深い。量子コンピュータが完成すれば科学が進歩するという話だったので未来がより楽しみなった。



講義にて用いられたスライドが非常にわかりやすく英語が上手く分らなかった部分をスライドで確認でき、理解しやすかった。



身近でない国の水の現状を知ることができたと同時にだんだん耳が英語に慣れたのでとても良かった。



なかなか外国の方の講義を聴くことがないので、とても良い機会になった。もっと詳しくたくさん話を聞きたい。話はおもしろい。



講義の前にナノテクノロジーについて少し調べたがあまり概要が掴めず良く分らなかった。しかし講義で実際に聴いてみてわかりやすく解説して下さったし、分からない部分を質問できたりしてとても良かった。

先生から

from teachers



普段の学びが結びつくことで感じる面白さがモチベーションになる。研究者になるという選択肢をより現実的に考えるきっかけになった。英語に触れる良い機会だと思うし、研究者から研究について生の声を聞ける貴重な機会となっていたと思う。英語ないし科学への興味関心を高める効果があったと思う。自分のレベルと必要なレベルのギャップがわかり、学習の見通しがついた。理解できた部分について自信にもつながるのではないか。事前学習も含めて科学英語へ触れる機会として効果的であると思う。



研究の内容だけでなく、出身国や生い立ち等も含めてお話してください、進路選択の面でも非常に興味深かった。生徒の事前の質問にも大変丁寧に回答いただき、生徒にとって非常に勉強になった。出身国の紹介は、動画も使われており、イメージしやすくてよかった。

講師から

from lecturers



I enjoyed the experience of the lecture and was able to help facilitate some of the questions from the audience, particularly about how one can become a researcher, and what are the best options to take within the Japanese system.



Students seemed interested in social science research. I think they understood its importance. They also seemed motivated when I talked about "why I wanted to become a social scientist".

参加校からのメッセージ 愛知県 愛知県立春日井高等学校 / 小久保 直美先生



本校には「理数コース」というクラスが設定されています。サイエンス・ダイアログの時間では2・3年生が合同(80名)で講義を受けています。内容を理解する力に学年の差はもちろんありますが、先輩(3年生)が講師と「英語でやり取りする姿」を後輩(2年生)に見せることが、お互いにとってよい刺激となっている様子です。また、「理数探究基礎」と「理数探究」という授業では、グループに分かれて探究活動(実験や実習など)を行います。その探究テーマを決める際もサイエンス・ダイアログで得た知識や情報を活かしています。このようにサイエンス・ダイアログで、学年や授業の枠を越えたインタラクティブな学びができています。